

# 国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所  
〒220-8739 横浜市西区みなとみらい 4-5-3  
神奈川大学 みなとみらいキャンパス 11 階  
TEL 045-664-3710 (内線 4100)

## 退職記念号

金谷 良夫 教授、菅原 晴之 教授、林 悦子 教授  
ありがとうございました!!



### 歲月人を待たず——出合い ——老教授の独白——

金谷 良夫

時の過ぎゆくのは早い。最早は老教授は消え去るのみだと筆者は捉える。一つのジェネレーションを本学において務めることができたことは幸甚の至りであるが、研究者としていかに身を処すべきか試行錯誤を重ねているうちに目に見えない齡(よわい)を惜しむ局面に立ったのである。むかし中国の詩人杜甫は「人生七十古来稀なり」と述べた。一九世紀のアメリカで齡七〇を迎えたマーク・トウェインは誕生日のスピーチで、七〇歳は「新たな、畏怖の念に満ちた威厳の域に達する人生の時期・・・譴責(けんせき)されない時期で、・・・聖書に基づいた限界の法則」(『マーク・トウェインスピーチ集』2001年)だと述べている。筆者としては結局のところ、顕著な業績を残すことなく馬齡(ばれい)を重ねただけかもしれない。所謂「少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んず可からず」である。しかしながら、特筆すべき事柄は、こうした歳月を費やすなか「人との出合いがある意味では人生の転機となる」(1998年)と述べたように、僥倖に恵まれ、学部のスタッフを含めた貴重な出合いが少なからずあったことである。

理不尽だが、嘗(かつ)て自分が齡をこれほど重ねるとは思いもよらなかった。換言すれば時の流れに抗えろと考えたのだ。だから若さにまかせてがむしやりに研究に尽力した。例えば、出版社の締め切りを守るために熱が四〇度出た時でさえ無我夢中で原稿を書き上げた。然るに、皮肉にも当時の出版社が倒産して原稿は日の目を見ることがなかった。その

後、端無くも、別の出版社の編集者に会い、その原稿が一冊の文法書になったのは本学の一員になってからである。別の例を挙げれば、ある教授の紹介によって京都の出版社を通じた編集者との出合いから、恰(あたか)も自分が人気作家になったかのようにホテルに缶詰めにされ限られた時間内でビジネス英会話書を一冊書いた経験もある。紆余曲折を経て最終的に八年もかかったが、アメリカ文学の論文をまとめて上梓する際も人との幸運な出合いがあったのだ。序(ついで)に言えば、当時は編集者が自宅までワープロ原稿を取りに来てくれるという古き良き時代であり、それを考えると隔世の感を禁じ得ない。また、折角の出合いがあっても、その機会を活かさず原稿を執筆できなかったことがあり、テキストを編む予定だった共著者や出版社に多大な迷惑をかけたことは未だ後悔の念を払拭しきれない。結果を出せなかった所以は惰眠にあった。

本学からの在外研究の好機を活かし、アメリカのカリフォルニア州の大学において研究できたことは極めて有意義だった。なかでもマーク・トウェイン研究所(マーク・トウェインプロジェクト)における出合いから一研究者としてのみならず一個人としても至福の時を過ごしたと言ってよい。研究所所長から「あなたは研究所のパーマネントメンバー」だと言ってもらったことは忘れられない言葉だ。それによって、自分の研究に関して質問があれば研究員(編集者)に対して何でも聞けるし、彼らは何でも真摯に答えてくれる。これほど配慮が行き届いた応

対はないと言っても過言ではない。結果的に「マーク・トウェイン全集」の一冊を翻訳し完成できた。マーク・トウェイン協会の「ニューズレター」にも書いたが、在外研究中にマーク・トウェイン扮装役者との出会いによって得られた彼の演技を観る機会とカリフォルニア州のソノーラの山頂での天体ショーの情景（日本から呼んだ息子と娘が一緒）とが心に焼きついている。たとえどんなに立派な研究所で研究できても、スタッフとの貴重な出会いがなければ意味は半減するだろう。

最後に、何と言っても人は齢を重ねれば重ねるほど月日の流れの早さを感じる。ヒポクラテスが述べるように芸術を修得するには長い歳月を要するにもかかわらず人生は短い、すなわち奥義を究めることは困難なのである。それゆえ心の拠り所は得難い出会いから人々と触れ合えることだ。そうして触れ合えて定年を迎えられること本紙面を借りて感謝の意を表したい。

(所員/かなや・よしお)

## 2021 年度シンポジウム開催報告

### 「横浜みなとみらい地区の活性化—ソーシャルデザインとデータサイエンスの視点から—」

行本 勢基

本学のみなとみらいキャンパスが開設されて一年が経とうとしている。みなとみらい地区にはどのような魅力があるのか。国内外の都市と比較した上で、その魅力を発信していくためにはどのような方策が必要となるのか。このような問題意識の下、本学国際経営研究所の共同研究プロジェクト（代表者・中見准教授）が 2021 年度より始まり、その成果報告を兼ねて去る 2 月 18 日～19 日にオンラインシンポジウムを開催した。オンラインであり、なおかつ直前まで準備作業に追われたため、広報や告知が十分に行えなかったにも関わらず、二日間で延べ 70 名を超える参加者を得ることが出来た。ご登壇頂いた皆様、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。本稿では、これまでの共同研究プロジェクトの経緯を踏まえて、シンポジウムでの議論の概要を紹介する。

中見准教授を代表とする共同研究プロジェクトには、経営学部の飯塚准教授、筆者の他、学外の専門家の方々を客員研究員としてお迎えし、おおよそ月に一回のペースで研究会を実施してきた。マーケティング研究から見た地域の活性化が主たるテーマとなっているが、そこに社会デザインとデータサイエンスの双方の視点を加えていこうとしている点に大きな特徴がある。社会デザイン研究については第一人者の立教大学・中村教授にご教授頂きながら、理論と実践の融合を図るべく、研究会では活発な議論を重ねてきた。みなとみらい地区の着工は 1983 年に遡り、ウォーターフロント開発が基軸となっていたといわれる。その後、千葉の幕張エリア、埼玉のさいたま新都心等と並ぶ首都機能移転が目標とされ、現在までの間にエンターテイメント施設、商業施設、国内外の大手企業の研究開発機能が集積するエリアへと変貌している。こうした都市の発展過程を丹念に追っていくと、みなとみらい地区が横浜市の中でも特異な位置づけとなっていることに気付く。それは、着工後 40 年近く経過した現在において、行政の他、民間事業者、研究機関等が集積しながらも、各主体間で共通する都市、コミュニティのイメージが形成されていないのではないかとと思われる点である。本共同研究プロジェクトでは、社会デザイン研



究を援用しながら住民視点、市民視点の重要性が幾度も指摘され、都市形成において住民、市民のエンゲージメントをいかに高めていくことができるか、という問題意識を持つようになった。

その一方で既に観光分野やモビリティ分野においては、東京大学や横浜国立大学の先生方を招きながら様々な実践が行われており、人流データを基にしたエリア内の有機的な連携、つまり、事業者間の連携が模索されていることが分かった。みなとみらい地区はその他の同等エリアと比較し、高級ホテル群がより多く集積していることが判明しており、MICEの活用といった観点からエリアマネジメントが盛んに検討されていた。そこで、二日間にわたるオンラインシンポジウムでは、既に実践されている人流データの蓄積を踏まえてデータサイエンスの専門家もお招きし、社会デザイン研究との双方の視点からみなとみらい地区を取り上げることを主眼に置くことにした。初日は社会デザインの視点から専門家をお招きした基調講演とパネルディスカッション、二日目はデータサイエンスの視点からよりみなとみらい地区に焦点を絞った形での基調講演とパネルディスカッションをそれぞれ実施した。



初日の基調講演では、立教大学の中村教授より社会デザインに関する理論的な背景を、その後、みなとみらい地区でも様々なネットワーク活動を実践されている田口氏より東京・丸の内地区での取り組みをご紹介頂いた。中村教授は、個人が当事者意識をもって地域の課題に取り組むことの重要性を強調された。田口氏も丸の内地区では積極的に個人と個人の関係構築に尽力し、そのコーディネイト機能が都市の活性化には欠かせないとのこと指摘であった。

パネルディスカッションにおいては、神大国際寮を新しく設計された西田氏、神戸やニューヨークの公共空間で社会実験を繰り返されている津川氏から各種事例を紹介してもらい、ソーシャルアートという視点から興味深い議論が展開された。アート、芸術を通じてみなとみらいが生活圈域であり、更に個人の感性が解放されていくような空間となる可能性が共有された。

二日目の基調講演では、横浜国立大学の佐土原教授よりデジタルツイン都市モデルのご紹介を頂き、みなとみらい地区での実証実験の様子をご教授頂いた。「ヒト→モノ→ヒト→モノ」の連続的な作用が都市の形成には重要であり、マルチエージェントシミュレーションを用いながら、その作用の把握に努めているが、課題が多々あることを指摘された。理研数理の松崎氏のご講演では、スーパーコンピュータの富岳を利用したバーチャル空間と物理空間の融合についてお話頂いた。防災や気象予報などスパコンを利用した各種シミュレーション結果の応用、それに伴う便益は高まっており、みなとみらい地区の実証実験等で富岳を利用する可能性が示唆された。

パネルディスカッションでは、みなとみらい地区のエリアマネジメントを担当するYMM21の古木氏より最先端の情報をご提供いただいた。みなとみらい地区の各主体を中心とする横浜未来機構（通称YOXO）が2021年に任意団体として設立され、3つのビジョンが提唱されたという。それらは、「みらい体験都市」、「挑戦者応援都市」、「領域越境都市」であり、このビジョンの下、みなとみらい地区を中心として様々な実証実験を行う予定であり、その第一弾としてミュージックシティ構想が紹介された。初日のパネルディスカッションにも参加されたぴあの平野氏らがストリートミュージック構想を掲げておられ、2022年度に実践する予定という。アメリカテキサス州オースティンで開催されているサウスバイサウスウェストを目指しつつ、横浜のオリジナリティを追求していくとのことで、本学の学生を交えながら今後の展開が大いに期待される。

初日、二日目の議論を踏まえると、改めて都市、コミュニティを構成する主体の能動的な関与が重要

であることに気付かされた。中村教授は、「社会が変わる」ではなく、「社会を変える」ことが社会デザインの要諦であると指摘されたが、まさにみなとみらい地区に属する全ての主体が能動的にコミュニティ形成に関与し、この地区の将来について構想してることが出来れば理想的である。そのためには、「みなとみらいらしさ」を明らかにした上で、それに価値を見出し、主体的に関わる市民、住民の存在が欠か

せない。そのエンゲージメントを高めることで、結果的にみなとみらい地区の文化が創出されるのであり、本共同研究プロジェクトの最終的な目標であることを再認識した。2022年度以降は、この認識の下、みなとみらい地区の住民、市民を巻き込んだ様々な試みを実践する予定であり、共同研究プロジェクトの成果を幅広く発信していきたいと考えている。

(所員/ゆきもと・せいき)

## 事務局からのお知らせ

### 【2021年度国経営研究所活動報告】

#### <出版活動>

- 『国際経営フォーラム』 NO. 32 を発行  
テーマ：『レジリエンス』
- 『国経研だより』の刊行  
68号、69号、70号、71号
- プロジェクトペーパー55号、56号 刊行

#### <講演会活動報告>

##### 卒業生特別講演会 (2021年度)

2021年11月30日 (火) MMC4020およびオンラインにて  
テーマ：『ルールを外れたその先』

##### 講演者

- 勝連 滉一 氏  
(株式会社Nature Innovation Group COO)
- 佐藤 遼太郎 氏  
(AnMAKE TOKYO 合同会社 CEO)
- 菅野 佑樹 氏  
(ラジャアンパット合同会社 CEO)

##### <シンポジウム開催報告> (詳細はP.2-4掲載)

2022年2月18日 (金) ~19日 (土) Zoomによる開催  
テーマ：『横浜みなとみらい地区の活性化—ソーシャルデザインとデータサイエンスの視点から』

##### 2月18日-19日講演者

- 中村 陽一 氏  
(立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授/社会デザイン研究所所長)
- 田口 真司 氏

(一般社団法人 大丸有環境共生型まちづくり推進協会 プロジェクトマネージャー)

- 佐土原 聡 氏  
(横浜国立大学副学長 大学院都市イノベーション研究院 都市イノベーション部門 教授)
- 松崎 健一 氏  
(株式会社理研数理 取締役/株式会社JSOL 創発ビジネスセンター シニアスペシャリスト)

##### 2月18日-19日パネリスト

- 関口 昌幸 氏 (横浜市共創推進室共創推進課 担当係長)
- 西田 司 氏 (オンデザインパートナーズ代表/東京理科大学准教授)
- 津川 恵理 氏 (建築家集団ALTEMY代表/東京藝術大学教育研究助手)
- 平野 学 氏 (ぴあ株式会社 コンテンツ・コミュニケーション本部 コンテンツ・コミュニケーション事業局局長)
- 古木 淳 氏 (一般社団法人横浜みなとみらい21 事務局次長・企画調整部長)
- 中村 陽一 氏 (上記)
- 田口 真司 氏 (上記)
- 佐土原 聡 氏 (上記)
- 中見 真也 (神奈川大学 経営学部 准教授)

### 【研究用機器貸出のお知らせ】

今年度、研究所にてカメラレンズを購入しました。

貸出しておりますので必要な時には研究所へお申し出下さい。

貸出機材：カメラ、スキャナ、ビデオ、PC、プロジェクター他

